B部門小学部１年「HI」

＜ケースの実態（特徴的な○長所、●課題＞
○　好きなことの認識や興味の幅が広がってきている。
●　自分のペースを崩されると座り込みなどの行動がある。

＜指導目標＞
1　好きなことを活用して他者を意識して関わる。
2　様々な体の動かし方を経験し、体の使い方を意識する。

＜自立活動の関連項目＞と＜指導内容＞
3　人間関係の形成
(1)　他者とのかかわりの基礎に関すること。
5　身体の動き
(1)　姿勢と運動・動作の基本的技能

→

①　カードやサイン等を用いて、自分の要求を伝える。
②　様々な身体の動かし方を経験する

1　流れ図

児童は身の回りの物の名前は理解しており、日常生活での指示もある程度理解している。休み時間は一人で楽しく過ごしている。その一方で、自分のペースを崩される（友達を待つ、教室まで歩くことを促すなど）の場面では座り込んでしまうことが多い。また、朝のランニングでは直ぐに座り込んでしまい、走り続けることが難しい。そこで、①知的に重度で理解できることが少なく、他者への意識もないため、指示に従ったり、ルールを理解したりすることが難しいと考えた。好きなことを活用して他者を意識し、その中で理解できることが増えたり、信頼関係を築いたりすると考えた。②身体の発達が未熟で筋力も弱いため、歩いたり止まったりすることが苦手である。様々な体の動かし方を経験し、身体の発達を促すことで、周りのペースにも合わせられるのではないかと考えた。自立活動の６区分 27 項目とは、①は３　人間関係の形成 (1) 他者とのかかわりの基礎に関すること。②は５　身体の動き (1) 姿勢と運動・動作の基本的技能に関すること。に関連する。

９月　「日常生活・体育科における」における指導の実際	
指導内容	①　カードやサイン等を用いて、自分の要求を伝えられる機会を増やす。 ②　様々な体の動かし方を経験する。
手立て	①　写真カードを用いたやりとり場面の設定。 ②　小集団で朝の運動を行う。
評価（様子）	①　**人に伝えれば叶う**と理解しつつある。 ②　時々注意がそれるが比較的スムーズにできた。
指導助言	①　やり取りをする機会を増やし、見通しをもてるようにしていく。 ②　**自分の体を自分で支える力**を育てる。
今後の指導方針	①　言葉が**児童に届くように**コミュニケーションをとる。 ②　**体の芯（支持する力）を育てる。**

2　「日常生活の指導」「体育科」における指導の実際

９月の様子は、①自分の要求を伝える機会を増やすために、写真カードを用いた。その結果、人の顔をしっかりと見て、カードを教員に渡し、「貸して」とサインでと伝えられるようになった。②朝の運動を慣れた教室で行った。学年の集団で参加すると、注意が散漫になったり、ペースについていかなかったりするからである。小集団で行った結果、一人でできる動きが増えたように感じた。

今後の指導方針として、①やり取りをする機会を増やして見通しをもてるようにしていく。そのために、言葉が児童に届くように、しっかりと目を合わせてやり取りを行う。②自分の身体を自分で支えられるように、補助するようにする。そのために、立ち上がる場面では、児童が自ら足を地面につけるように補助をする。

B 部門小学部　1年生の実践

11月　「国語科・体育科」における指導の実際	
指導内容	①　カードやサイン等を用いて、教員とやり取りをする経験を積む。 ②　体の芯（支持する力）を育てる。
手立て	①　児童の動きを静止し、目線を合わせてやり取りをする。 ②　集団の中で様々な身体の動かし方を経験し、体を育てる。
評価 （様子）	①　◎　自分から話し掛けたり、サインを模倣したりするようになった。 △　一目散に思いを遂げようとすることが強まった。 ②　活動や動き慣れてきて、自分から行う動きがでてきた。
指導助言	①　やりとりを行って意思を尊重できる時間を設ける。 ②　目的が明確な活動で十分に身体を動かして楽しむ。
今後の 指導方針	①　触っていい物は**やりとりを行い、触れることができる**場面を設ける。 ②　**やることがわかりやすい活動**で十分に身体を動かして楽しむ。

３　「国語科」「体育科」における指導の実際

11 月の様子は、①このころから授業の絵カードとサインが一致してきており、教員と教材を介したやり取りを楽しむ様子が見られるようになった。その反面、思いを遂げようとすることが強くなり、好きな教材などはすぐに引っ張り出すようになった。②活動に慣れてきて、自分でできる動きが増えた。ランニングでは足がもつれることがなくなった。注意が逸れることも少なくなり、走り続けられる日が増えた。

今後の指導方針として、①児童のお気に入りの教材は「貸して」とやり取りをしてから使えるようにする。また、触っていい物コーナーを用意し、やり取り後、存分に触れられるようにする。②やることがわかりやすい活動で充分に身体を動かせるようにし、授業はシンプルに、とにかく分かりやすい構造を意識して行う。

まとめ	
結果	①　伝えたという気持ちが出てきて、絵カードやサインを使って話し掛けてくる場面が増えた。 ②　体力が付いてきたことで、座り込みが少なくなってきた。
考察	◎　自立活動の視点を取り入れたことにより、学校生活の様々な時間に指導目標を意識することができ、一貫した指導ができた。 ◎　様々な先生方からアドバイスを頂けたことで、自分では考えられなかった指導や工夫ができた。
次年度に向けて	【身体の動き】 目的を明確にし、動きを達成できるようにする。 【環境把握】 要求を受け止めてもらえる環境をつくり、時間を区切ってやりたいことをやれるようにする。

４　まとめ

最後に２学期終了時点での２つの成果をまとめる。①好きなおもちゃや教材を「貸して」とサインでやり取りを行うようにしたことで、教員に何か伝えようとする行動が増え、教員の目を見ることができるようになってきた。②個別にリズム運動を行ったり、自分の力で立ち上がるように支援したりしたことで、自ら出来る動きが増え、体力が少しずつつき、廊下での座り込みは減った。

以上のように流れ図を活用し、自立活動の視点をもった指導を行ったことで、児童にとって一番達成させたい目標を一つの授業だけではなく、登校から下校まで、常に念頭に置いて指導することができた。また、複数人の教員の視点から支援を考えたことで、より効果的な指導ができたと感じる。

B 部門小学部　5年生の実践

B部門小学部５年「NR」

＜ケースの実態（特徴的な○長所、●課題＞
- ○ 学校生活のおおまかな流れを理解し、教員の指示を受け入れながら、大きな問題行動もなく集団活動に参加することができている。
- ○ 周囲の人と関わりたい気持ちが強く、視線を合わせたり、使えるハンドサインを示したりする。
- ● 発語がほとんどみられない。
- ● 明確に気持ちや意思を伝えられるコミュニケーション手段をもっていない。

＜指導目標＞
コミュニケーションの手段を増やし、学校生活の中で定着を図る。

＜自立活動の関連項目＞と＜指導内容＞
3　人間関係の形成
(1)　他者とのかかわりの基礎
⇒ **やりたい行動を絵カードで伝える。**
6　コミュニケーション
(4)　コミュニケーション手段の選択と活用

1　流れ図

＜ケースの実態＞

自閉症学級に在籍している。日常生活場面で意味をもった発語がほとんど見られない。教員からの 2 語文程度の簡潔な言語指示や、指差し、「トイレ」や「給食」、教科名、活動名を表わす数種類のハンドサインなどから、やるべきことを、状況と合わせて理解していて、問題行動を起こすことなく学校生活を送ることができている。

自立活動の流れ図を作成するにあたり、本児の行動を再確認してみると、何かを「伝えよう」「確認しよう」としている行動が多くの場面でみられた。しかし、明確なコミュニケーション手段をもたないために、本当に伝えたいことの真偽があいまいなまま、コミュニケーションが広がりや深まりを見せることがなく、この点が、本児の自立活動の指導における大きな課題であると考えられた。

そこで、自立活動の指導目標として、「コミュニケーションの手段を増やし、学校生活の中で定着を図る」と設定した。

また、視覚情報の認知が高い本児の特性を生かし、絵カードを用いたコミュニケーションを導入し、「やりたい行動を絵カードで伝える」ことを指導内容の中心として据えることとした。

9月　「教員とのやりとり場面」における指導の実際	
指導内容	・コミュニケーションの手段を増やし、学校生活の中で定着を図る
手立て	① 対象児童が好きな「もの」や「活動」を選定し、絵カード化する。（「IPad」「そうじき」「赤ワゴン」など　（写真１参照）） ② 児童と教員が余裕をもってやりとりができる時間帯（給食配膳準備の時間や昼休み）に、絵カードを用いて要求行動のやり取りを行う。
評価（様子）	・ 欲しいものが、**明確に相手に伝わり、嬉しそうな表情**をしていた。 ・ **自分から**絵カードファイルを取り出して、伝えたい「もの」の絵カードを選択し、貼り付けて、教員へもっていこうとしていた。
指導助言	◎ 今後に役立ちそうな良い支援方法。 △ 無理に発語させようとしたり、確認させたりしない。 **「カードを受け取り、目的物と交換する」ことに主眼**をおく。 絵カードが便利なツールとして機能するように関わるとよい。
今後の指導方針	絵カードを用いて、自分の要求を伝える場面を多く設定し、コミュニケーションの手段として定着させていく

写真１：絵カード

①児童が自主的に用いやすいように、自席にぶら下げておく。

②誰に、何を、どうするのかを選んで、黄色い台紙に貼る。

③ほしいものを持っている教員のところへ行き、カードを手渡して要求を伝える。

2　9 月「教員とのやりとり場面」における指導の実際

＜手立て＞

PECS を参考に、絵カードファイルと絵カードを作成した。担任を中心とした、学年の教員とのコミュニケーションの中で「やりたい行動を絵カードで伝える」場面を意図的に設定し、定着・般化を図った。

学年教員が、本児に対して、比較的余裕をもってコミュニケーションをとることができる時間帯として、給食配膳の時間、および、給食後の日常生活の時間・昼休みの時間を考え、意図的に絵カードコミュニケーションを行う場面として設定した。

本児が大好きな「iPad」の要求については、絵カードコミュニケーションの手続きはすぐに定着し、自主的にカードを取り出してはりつけ、要求することができた。それ以外でも、iPad をもっていそうな教員に、絵カードを用いて iPad を要求しにいく、という様子も見られた。

外部専門員からは、「絵カードコミュニケーションはよい支援方法であるが、指導的な関わりをしすぎてコミュニケーションのハードルを上げてしまうのは好ましくない。シンプルに、カードを受け取って、目的物と交換してあげることで、「絵カードの受け渡しでコミュニケーションが成立した」ということをわかりやすく示し、本人の自発的なコミュニケーションを引き出してあげるとよい」との助言を受けた。この点を 10 月・11 月の指導に生かしていくとともに、新たに、担任以外の教員とも、絵カード使ってコミュニケーションをとる場面を、学年教員で協議の上、設定することとした。

B 部門小学部　5年生の実践

10月・11月　「教員とのやり取り場面」における指導の実際	
指導内容	コミュニケーションの手段を増やし、学校生活の中で定着を図る
手立て	・　絵カードを用いて、教員とやりとりすることに慣れる。 ・　**意図的な場面設定**により、活用できる絵カードの種類を増やす。 ・　**担任以外の教員**との機会を設定する。
評価（様子）	・　**新たな場面でも**絵カードを用いて教員とスムーズにやり取りできた。 ・　**設定していた場面以外でも**、自分から絵カードを選んで教員とやりとりする様子が見られた。
指導助言	◎　対象児童は、コミュニケーションマインドがよく育っている。 △　対象児の理解や記憶容量、集中力を考慮すると、要求を文章化させるよりも、単語レベルでよい。**名刺サイズのカードを携行できるようにして頻回に使えるように**工夫する。
今後の指導方針	・　ファイル形式からリング形式に。 ・　肩掛け式にして、携帯性・利便性を上げる。 ・　気持ちを表すカードの導入。

3　10 月・11 月「教員とのやり取り場面」における指導の実際

新たに追加された指導場面でも、絵カードを用いて、スムーズに要求することができるようになった。さらに、絵カードを用いて、自分が次に取りたい行動を教員に伝えたり、確認したりする様子も見られるようになった。

外部専門員から、「児童の記憶容量、集中できる時間の短さなどから考えると、当面は、現在用いている「(だれに)（なにを）（どうする）の 3 枚のカードを並べた文章形式」ではなく、「単語」レベルでよいので、自分で名刺サイスカードを携帯し、頻回に使えるようにした方が良いのではないか。
受け取る側は、児童の気持ちがそれてしまわないように、カードを見ただけですぐに応じることで、「カードを使いこなせる」ようにしてあげるとよいと思う」「気持ちを表すカードも先々使えるようになればいいと思う」との助言を受けた。

そこで、今後の指導方針として、写真にもあるように、ファイル形式から、リング形式に絵カードの仕様を変更し、肩掛け式のひもをつけて、常に携帯できるようにした。さらに「うれしい」「かなしい」という 2 枚の気持ちを表す絵カードも取り入れた。

まとめ	
結果	・　使用場面は限定的だが、**絵カードを自主的に取り出して**、やりたいことを教員に伝えることができるようになった。 ・　要求が、**相手にしっかり伝わったことで、自信をもって活動**に取り組む様子が見られた。さらに、今までは無言で行っていた行動に、発語が伴う様子が見られるようになった。
考察	**児童の立場から** ・　学年全体の**教員が協力体制をとること**で、絵カードの使用機会を幅広く設定できて定着が進んだ。 **教員の立場から** ・　児童の現状や外部専門家からの助言を共有し、教材の製作や改良に協同で努めるなど、児童の課題解決に向けて取り組むことができた。
次年度に向けて	・　絵カードについては引き続き活用し、さらに場面や相手を広げていく。 ・　指差しができるので、1枚カードに 4 ～ 6 種類の絵をのせて、指差しで伝えられるようにしていく。

4　まとめ

コミュニケーション手段としての絵カードの使用は、意図的に設定した場面で、自主的にカードを取り出し、教員に伝えることができるようになった。また、設定した場面以外でも、気持ちの絵カードを自主的に取り出して、「かなしい」と教員に訴えてきたり、大便をしたいときに、カードをみせて伝えてきたりすることもあった。カードの操作性も向上し、素早くめくって、伝えたい事柄の絵カードを指差しで示すことができている。さらに、絵カードでのコミュニケーションが定着してくるにつれ、無意味語ではあるが「発語」する様子が、頻繁に見受けられるようになった。自分から発信（コミュニケーション）しようとする気持ちが強まっていると受け止めている。

絵カードコミュニケーションの定着が進んだ要因として、学年の複数の教員が、絵カードという同じツールをつかって、積極的に、対象児童に対して同じ関わり方ができたことが大きいと考えられる。学年全体の教員が、外部専門員からの助言指導を共有しながら、協力体制をとり、どのような場面で、絵カードのコミュニケーションを設定できるかなどをそのつど協議し、絵カード作成などの作業を共同で行えたことも、効果的でした。

今後は、さらなる絵カードコミュニケーションの定着に向けて、使用できる場面や相手を増やして使用頻度を上げていくとともに、1 枚の絵カードに同分類の複数の絵を載せて、指差しで伝えられるようになるなど、発展させていきたいと考えている。将来的にはタブレット端末などの ICT 機器を活用して、対象児童が自分の気持ちや、意思をスムーズに他者に伝えたり、他者からの思いを受け止めたりすることにつながって行けばよいと思う。

B 部門中学部　1年生の実践

B部門中学部１年「TK」

＜ケースの実態（特徴的な○長所、●課題＞

○　絵カードへの興味が強い。
○　人が好き。（特定のやりとり）
○　発語はないが伝えようとする気持ちが強い。
●　伝えようとするよりも手が先に出やすい。
●　思い通りにならないと自傷や他害が出る。

＜指導目標＞

1　絵カードを使って、**穏やかに**伝える。
2　教員の促しに**少し応じてから**、好きなことをする。

＜自立活動の関連項目＞と＜指導内容＞

6　コミュニケーション
⑴　コミュニケーションの基礎的能力に関すること　⇒　**絵カードを使って穏やかに伝えることを覚える。**

5　環境の把握（途中で追加した）
⑸　認知や行動の手掛かりとなる概念の形成に関すること　⇒　**２枚のスケジュールに応じる。**

１　流れ図

今年度の９月に受検した太田ステージでは、ステージⅠ－３という結果が出ている生徒である。ケースの実態の長所として、「絵カードへの興味が強い」、「人が好き」、「発語はないが伝えようとする気持ちが強い」の３つが挙げられる。一方で、課題として、「伝えようとするよりも手が先に出やすい」、「思い通りにならないと自傷や他害が出る」の２つが挙げられる。指導目標は、長所を生かして課題を克服するという視点で２つ考えた。１つ目は、「絵カードへの興味や伝えようとする気持ちが強い点」を生かし、「絵カードを使って穏やかに伝える」ことである。２つ目は、「人が好きで特定のやりとりを好む点」を生かし、「教員の促しに少し応じてから、教員に望みを叶えてもらう経験を積む」ことである。自立活動の６区分 27 項目では、６　コミュニケーション　⑴　コミュニケーションの基礎的能力に関すること、５　環境の把握　⑸　認知や行動の手掛かりとなる概念の形成に関することに関連する。

９月　「休み時間」における指導の実際	
指導内容	絵カードを教員に手渡して伝えること。
手立て	好きな物で注意をひき、手を伸ばしたときに 絵カードをとることを促し、手渡したら交換する。
評価（様子）	絵カードを渡せば、要求が伝わることを理解した。
指導助言	◎　物を介した穏やかなコミュニケーション方法を学べている。 △　要求が一方的。⇒要求は、**すぐに叶わないことも。**
今後の指導方針	**教員の指示に応じると、要求が叶う経験も同時に積む。**

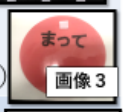
画像１

２　「休み時間」における指導の実際

９月は、休み時間において、「絵カードを教員に手渡して伝えること」に絞って指導した。手立てとしては、本人の好きな音の出る本やタイマーなどを使って注意をひき、手を伸ばしたところで絵カードを取ることを促し、絵カードを教員に手渡したらすぐに好きなものと交換するようにした。絵カードを渡すと要求が伝わることをすぐに理解し、絵カードが手元にあり、手渡せる距離に教員がいるという条件で、絵カードに手を伸ばすことを覚えた。一方で、外部専門員の先生から、要求が一方的であるという指摘もあった。そこで、教員の指示に応じると要求が叶う経験を、絵カードコミュニケーションと同時に行うこととした。

10月　「休み時間」における指導の実際	
指導内容	①　絵カードで伝えられることの種類を増やす。 ②　待つことを教える。
手立て	①　絵カードの種類を増やし、渡してきた絵カードに対応したものを渡す。 ②　「待ってカード」を手渡して数秒待ってから、カードを交換して要求を叶える。（待たせなくてもいいときから練習）
評価（様子）	①　好きな物の絵カード５枚程度を難なく弁別して要求できた。 ②　「待ってカード」は上手く活用できず。
指導助言	②　「なにもしないで待つ」というのは、そもそも難しい。 （待ってカード＋暇つぶしアイテムが必要だったかも…） ⇒「〇〇してから〇〇ね」の指導を。
今後の指導方針	１つ先の見通しを示す。 ２枚のスケジュールの枠組み⇒環境の把握の視点

画像２



画像３

画像４

３　「休み時間」における指導の実際

指導内容の①の内容は、９月から継続し、絵カードの種類を少しずつ増やしていった。渡してきた絵カードに対応したものを渡すことで、対応したものを渡さないと、望みのものが手に入らないことに徐々に気付き、絵カードを区別できるようになった。前のスライドの今後の指導方針である「教員の指示に応じると、要求が叶う経験も同時に積む」ことに関しては、「待ってカード」を活用し、数秒待つことを指導した。しかし、「待ってカード」は、上手く活用することができなかった。待つ間にやることが不明確で、本人が何をしたら良いかが分からなくなり、不適切な行動が出ることが多くあったからである。外部専門員の先生からも、「何もしないで待つ」のは難しいという指摘を受け、「環境の把握」の視点から、本人が１つ先の見通しをもつための視覚的な枠組みを作るのはどうかと御助言をいただいた。

まとめ（２学期終了時点の様子）	
結果	①　自ら絵カードを探して、教師に渡して**穏やかに伝えるように**なった。 ②　国・数の個別課題終了後に、好きな物が使えることが分かり、**期待感をもって穏やかに課題に取り組むように**なった。
考察	**本人の立場から…** ①　伝わりやすく便利なものと認識した。 ⇒絵カードを渡す手続きが「しつれいします」を兼ねており、**「より望ましい意思や要求の表出方法」**となった。 ②　２枚のスケジュールを**「行動の手掛かり」**として認識した。
次年度に向けて	・　絵カードの種類を増やしつつ、**伝える相手や場面を広げていく。** ・　２枚スケジュールを活用する場面を増やして、**行動の手掛かりとなる枠組みとして般化していく。**

４　まとめ

２学期終了時点での２つの成果をまとめる。１つ目に、教室内で欲しいものがあるときに、自ら教室にある絵カードを探して取り、教員に渡し、自分の欲しいものを具体的かつ穏やかに伝えることができるようになった。絵カードで伝える経験を積んだことで、絵カードを便利なものと認識したと考えられる。また、絵カードを渡すワンクッションがあるため、気持ちを落ち着かせて伝えることもできた。２つ目に、国数の時間に、２枚のスケジュールを活用して指導を行った結果、期待感をもって穏やかに課題に取り組む場面が見られるようになった。絵カードを指さして確認する様子から、行動の手掛かりとして、２枚のスケジュールを活用していることが見て取れた。これらのことから、流れ図を活用し、自立活動の視点をもった指導を行ったことで、生徒の課題だけではなく、長所にも視線を向け、長所を生かした指導を行うことができた。

B 部門高等部　1年生の実践

B部門高等部１年「K・D」

＜実態（特徴的な○長所●課題＞
○自分の「やりたいこと」「やりたくないこと」を正確に伝えることができる。
●精神的な負担から胃腸への影響があり、トイレに行きたがる。また、不安な場面から離れるために意図的に脱糞、嘔吐などがある。

＜指導目標＞
・指示や指摘を受けて、**気持ちの切り替え**ができる。
・問題行動（自傷、遊出、脱糞、欲求に対する衝動的な行動）に対する**自己抑制**を身に付ける。

＜自立活動の関連項目と、指導内容＞
環境の把握・「わかっている」→拒絶の連動を減らしていく。
身体の動き・衝動的な行動を抑制するための約束を作る。
数値的な目標を立てて、時間や約束を守って行動することができる

１　流れ図

＜ケースの実態＞
　KD さんの言語能力は比較的高く、自分の意思を言語表出により伝えることができる生徒だが、やりたくないこと、興味が持てない学習内容などに対する逃避行動や、指摘に対する拒絶や注目行動として自傷や脱糞が頻繁にみられた。
＜指導目標＞
　①指示や指摘を受けて、気持ちの切り替えができる。
　②問題行動（自傷、遊出、脱糞、欲求に対する衝動的な行動）に対する自己抑制を身に付ける。
＜自立活動の関連項目＞と＜指導内容＞
「気持ちの切り替え」や「自己抑制」の指導目標の後ろ盾として、本人が「意思が受け止められているという」実感と「約束を守る事で自尊心を肯定された」という達成感を感じる事を大切にした指導を心掛けた。

9月～１１月　「日常生活」における指導の実際	
指導内容	**トークンカード**を目標に、今やるべき活動を行う
手立て	今日の予定や次にやらなければならないこと（約束）を短時間単位で記入したトークンカードでモチベーションを保つようにする。（写真をご覧ください）
評価（様子）	達成しやすい目標に対しては効果的に活用できた。家に持ち帰って保護者が確認することで学校での活動の様子を知り、家でも褒めてもらえる環境ができた。達成しにくい、あるいは興味をもつことができない目標に対しては徐々にトークンカードでの効果は得られなくなった。
指導助言	生徒の状況によって「分かりやすい言葉(絵カード)による指示」⮵「支援シートを見てスケジュールや次の予定への理解」⮵「友達の動きを見て行動する」⮵「先生と共に行動する」⮵「じっくり待つ」などの支援レベルの指導法を使い分ける。
改善点	**カードにより他のセンソリーグッズへの執着がなくなり、他教科や担任以外の先生方にも本人の目標がはっきり示すことができるので、このまま継続する。**

①

②

２　実際に使われたトークンカード

①は使い始めの頃のもので、先生の手書きの約束や、約束を守れずシールをもらえなかった時の手書きの理由が目立っている。
②は 2 学期の終わり頃のもので、目標が「2 学期のふりかえり」のように自分の行動を客観的にみることができる成長があることが示され、「面白い話」とか「一緒に踊ろう」など「楽しいことを期待できるようになった」がわかる書き込みが見られる。シールが半分の場面には、「もう一息だった」というメモがあり、そこに KD さんの「少しは頑張ってみよう」とする意識の変化を大きく感じる。

B 部門高等部　1年生の実践

１１月　「音楽の指導」における指導の実際	
指導内容	音楽の授業に参加する
手立て	・教室移動時にリズミカルな言葉かけを行い、楽しい気持ちで音楽室に入室できるようにする。 ・STが近距離に待機し、次に行う活動を簡潔な説明とともに提示し見通しをもてるようにする。 ・逃避発言が見られたときは、今やるべき活動と発言の活動の順番を紙に書いて目視確認できる場所に掲示する。
評価（様子）	音楽室への入室を回避したい言動は見られたが、言葉かけに従い入室した後は活動にスムーズに入ることができた。途中でトイレに行きたいという逃避発言があったが、付箋に「トイレは授業が終わってから行きます」と書いて提示することで最後まで授業に参加できた。
指導助言	紙に書いた約束事を、譜面台に貼り目の前に置いていたのは効果的であった。途中4回ほど先生にトイレを要求していたが、このメモを見て了解し最後まで授業を受けることが出来た。言葉と文字を合わせた指示と「〇〇ならば～である」という約束やルールを基にして、適切な行動に繋げることができる。

３　「１１月の授業風景」における指導の実際

トークンカードの他の手立てとしては、前向きな言葉掛けと、「今やるべき活動と本人がやりたい活動の順番を目視確認できる場所に掲示する」など静かで冷静な対応である。必要な行動事項を紙に書いて提示することで指示焦点がぶれることなく伝わり見通しをもった行動を促すことができた。今やっている授業に集中でき、結果、授業の楽しい部分まで進むので、自然に「トイレは授業が終わってから」ができた。

まとめ	
結果	・本人が困った時、気軽に相談できる先生が身近にいて、本人と先生との会話ツールとしてトークンカードを活用できることで行動する目的の理解や意欲へとつなげることができた。 ・シールを貼ることで、本人が一日の学習・生活を振り返ることができた。 ・トークンカードという支援シートを基に、体調管理(遅刻、生活リズム)、生活面(着替え、排せつ、食事)、学習面(授業参加)などについて、長期的な状況を把握できることが分かった。 ・先々、保護者との面談などで活用できると思われる。
考察	トークンカードが「意志の伝達」「環境の把握」「情緒の安定」のそれぞれに様々な角度で効果があり、長期的見通しとともに改善しながらの継続使用が重要であると考える。
まとめ	基本的な視覚支援、言葉かけ、目標の提示、褒められることでの意欲と成長効果をじっくりあきらめずに継続することで、問題行動を自然に改善できることが分かった。1年から2年への進級時はクラス替えがあるので、引き継ぎをしっかり行う。

４　まとめ

本人が「意思が受け止められているという」実感と「約束を守ることで自尊心を肯定された」という達成感を感じることを大切にした指導は、トークンカードや視覚支援を媒介としたコミュニケーションにより行き届き、「意志の伝達」「環境の把握」「情緒の安定」に様々な角度で効果があった。この取り組みは教員の地道な観察と、粘り強さ、そして実施し改善していくには大きなエネルギーがいる。でも、この手作りの「ご褒美作戦」は個々の生徒の実態に合わせた工夫のしどころ満載で、教員の力量の発揮しどころでもあると感じる。「日々の積み重ね指導」が重要な自立活動指導の観点からも、役立つツールとして着目したい。また、教員の情報交換にとっても、生徒の動きや担任の指導の情報共有の手立てとして生かせると感じ、そのようにして「みんなの目で育てる自立活動指導」が大切であることを再認識した。

B 部門高等部　2 年生の実践

B部門高等学部２年「HS」

＜ケースの実態（特徴的な○長所、●課題＞
○指示を聞いて応じることができる。
○他害やパニックがなく比較的気持ちが安定している。
●自分で終わりを判断して勝手に離席する。
●ダンスなどが始まるとその場所にいられない。

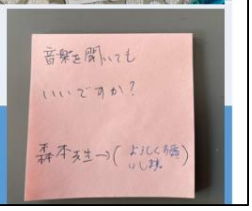
＜指導目標＞
◎良いところを生かして課題に取り組む。
○好きな余暇活動を増やし、楽しみを見つけて健康に生活できるようにする。

＜自立活動の関連項目と、指導内容＞
充分な予告を繰り返し、やることの順番、終わりなどの見通しをもたせる。視覚的にわかる予定表、場所の写真、工程表などで補いながら、どこまでやったら好きなことをしていいか知らせる。

１　流れ図

＜ケースの実態＞（特徴的な○長所、●課題）
○指差しなどで意思表示ができる。○指示を聞いて応じることができる。
○他害やパニックがなく比較的気持ちが安定している。
●自分で終わりを判断して勝手に離席する。●ダンスなどが始まるとその場所にいられない。
＜指導目標＞
◎良いところを生かして課題に取り組む。
○人とのかかわりをもち得意な指先を使った作業などで目標を達成し好きな余暇活動を増やし楽しみを見つけて健康に生活できるようにする。
＜自立活動の関連項目と指導内容＞
充分な予告を繰り返し、やることの順番、終わりなどの見通しをもたせる。視覚的にわかる予定表、場所の写真、工程表などで補いながら、やること、済んだこと、やっていいことを明確に示していく。自分勝手に終わらせず、どこまでやったら好きなことをしていいか知らせる。

12月　「日常生活の指導」における指導の実際	
指導内容	1日の予定　振り返り　明日の予定など
手立て	コミュニケーションボードや写真などを用意する。
評価（様子）	隙を見て自分のやりたいことを行う間合いを図っている様子である。「約束」が守れたら褒める等の積み重ねで指導する。
指導助言	どこかに行くときは、担任の先生の許可証などをもって行きたい所を示すのはどうか？休み時間、自由にしてよい時間を明示するとよい。
改善点	自分の意思表示をするための物を担任に渡せるようにした。

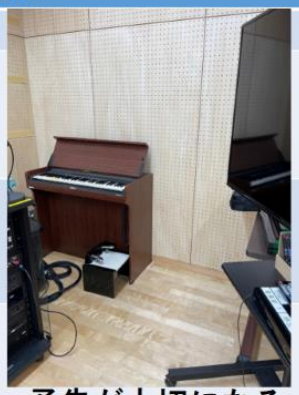


２　「日常生活の指導」における指導の実際

＜手立て＞
見て分かりやすい、コミュニケーションボードや写真などを用意し見通しがもてる手立てをする。
＜評価（様子）＞
隙を見て自分のやりたいことを行う間合いを図っている様子である。ボードを指して「約束」などの動作をするとか「約束」が守れたら褒める等の積み重ねで要求してから行動するように指導する。
＜指導助言＞
どこかに行くときは、担任の許可証などをもって行きたい所に行くのはどうか？その都度カードなどでやり取りするのは難しいと思われるので一日の始めに本人のホワイトボードに日課カードなど貼って予定を確認しながら行ってはどうか。休み時間、自由にしてよい時間を明示するとよい。
＜改善点＞付箋などでもよいので、自分の意思表示をするための物を担任に渡せるようにした。

B 部門高等部　2 年生の実践

11月　「音楽」における指導の実際	
指導内容	鑑賞　歌唱　楽器セッション　ダンス
手立て	行動の予告をする。十分に事前に予告することで本人が見通しをもって行動ができるよう支援する。
評価（様子）	ダンスが始まったらどこに行っていいのか事前に繰り返し場所を見せたところ、教室を出ていくことがなくなった。
指導助言	行動の予告がとても役に立った。ただ、スキを見てその場から離れたり勝手にで終了と決めてしまうところがあるため、予告が大切になる。
改善点	音楽で聞きたい曲への要求があったとき、今回はやらないということを明示する必要があった。



３　「音楽の授業」における指導の実際

＜手立て＞ことばや絵カードなどを利用し事前に予告することで本人が見通しをもって行動ができるよう支援する。
＜評価（様子）＞ダンスが始まったらどこに行っていいのか事前に繰り返し場所を見せて、行動を促したところ、教室を出ていくことがなくなった。
＜指導助言＞行動の予告がとても役に立った。ただ、スキを見てその場から離れ自分の中で終了と決めてしまうところがあるため、自分で判断をする前の予告が大切になるので支援が引き続き必要。
＜改善点＞音楽で聞きたい曲への要求があったとき、今回はやらないということを明示する必要があった。また家庭科では作業の工程が終わった、と自分で判断し教室を出てしまった。工程表などを利用して終わりを明示する。

＜結果＞
家庭科の授業では、この列を刺繍したら終わりなどと伝えると、見通しがもてて続けることができた。仕事の終わりが見えると自分で勝手に終わりと判断して教室から走り出すことが見られた。

スウェーデンししゅう　作業記録表　　月　日

手順	絵かな真	1	2	3	4	5	6	7	8	9
いとをえらぶ		○								
いとをきる		○								
いとをとおす(先生にたのむ)		○								
たまむすび(先生にたのむ)		○								
よくみてぬう		○								
いとをきる		○								
できた(先生がつける)		✿								

＜考察＞
家庭科では工程チェック表などを、担当するSTが使うのもよい。教室では、行きたい場所の写真カードや、「行ってもよい」という担任の許可証（付箋）を持って出かけることができてきている。

＜まとめ＞（次年度に向けて）
来年度も、自分のしたいことをするためには、担任やその場にいる教師に提示カードなどで意思を伝えてから次の行動に移るなどの手段を重ねていくことを続けて定着を図る。

４　まとめ

＜評価＞家庭科の授業では、この列を刺繍したら終わりなどと伝えると、見通しをもって続けることができた。作業の終わりが見えると自分で勝手に終わりと判断して教室から走り出すことが見られた。
＜考察＞高等部の全体指導の中ではなかなか難しいが、個別に見通しの持てる視覚支援の手立てが有効ではないか。家庭科では工程チェック表などを担当する ST が使うのもよい。言葉で伝えられない代わりに、別の手段で担任との意思疎通を図りどこかに出かけることができるという行動ができるようになってきている。自分の意思を相手に伝えて、相手の意思を確認してから別の行動に移るという定着の力が伸びてきていると思われる。
＜まとめ＞（次年度に向けて）
　来年度も、自分のしたいことをするためには、担任やその場にいる教師に提示カードなどで意思を伝えてから次の行動に移るなどの手段を重ねていくことを続けて定着を図る。

B 部門高等部　3年生の実践

B部門高等部３年「K.M」

＜ケースの実態（特徴的な○長所、●課題＞
○興味があることに対して積極的に取り組める。
●区切りをつけることが難しく、興味があることだけに取り組んでいることが多い。

＜指導目標＞
・自分の体調を整える。
・見通しを持って行動する。
・やってはいけないことを知る。

＜自立活動の関連項目＞と＜指導内容＞
・教員がジェスチャーで伝え教える。
・「これが終わったら○○」という言葉掛けをする。
・聞きなれているフレーズを探しながら指導する。
・やってはいけないことをした時に、周囲の安全を確保し、指導する。

１　流れ図

＜ケースの実態＞

自分に興味があることに対してとても積極的に活動できる生徒である。その反面、興味が湧かないことに対して活動することが難しい場面や、物を隠して興味を引くことがある。また、日々の生活の中で、情緒が不安定になることがある。その原因は、主に体調不良（便秘）、見通しを持てないことに対する不安、やってはいけないことに対して指導をした時である。

＜指導目標＞

①自分の体調を伝える。②見通しを持って行動する。③やってはいけないことを知る。

＜自立活動の関連項目＞と＜指導内容＞

①の目標に対しては、教員が問いかけを行いながらジェスチャーの見本をし、伝え方を教えることにした②の目標に対しては、「これが終わったら○○」と次の行動の見通しを持てるような言葉掛けをすることとした。③の目標に対しては、繰り返し根気強く指導することとした。

９月　「１日の授業風景」における指導の実際	
指導内容	1日を通して、授業に参加できるように促す。
手立て	○便秘等、不調を自分の言葉で教員に伝える。 ○朝の準備ボード」を提示する。 ○教員がメリハリをつけて指導する。
評価（様子）	○不調のとき言葉で伝えることができた。 ○朝の段階で、考え行動する習慣が身についた。 ○物を取る、遊びなどの逸脱行動が減りつつある。
指導助言	○良い所を見て、伸ばしてあげる。 ○動線やルーティンワークで行える作業を行うと良い。 ○各教科の授業では、個別の対応が必要である。
今後の指導方針	○積み上げができていない生活習慣については、卒業まで継続して定着を図る。 ○各教科の授業で授業に参加できるよう本人の能力に応じた個別の対応を図る。 ○朝の会の前に構造化を取り入れた作業を行い、物事を順序立てて行う習慣を身につける。

２　「1 日の授業風景」における指導の実際

＜ケースの実態＞

９月までの実践は、１日を通して、授業に参加できるように促した。手立ては、①毎朝健康チェックをし、便秘等、不調を自分から伝えられるように言葉掛けをする。②物事の順序を意識しながら行動ができるように「朝の準備ボード」を提示する。③やってはいけないことに対して繰り返し根気強く指導をする。とした。

評価は、①自分で不調のあるなしを言葉やジャスチャーで伝えられることがあった。②朝の段階で物事に対して自分で考え行動する習慣が身に付きつつある。③物を取る、遊びなどの逸脱行動が減りつつある。

B 部門高等部　3年生の実践

１１月　「まちだ祭体育館練習、家庭の授業」における指導の実際	
指導内容	体育館で劇練習に参加するように促す。
手立て	○台車、車いす、ボール等を活用し、体育館に入れるように支援する
評価（様子）	○自分で、道具を出し、目的地まで行くことができてきた。 ○その他の活動を自分から進んで行える。 ○言葉によるやり取りがとれるようになってきた。
指導助言	○視覚支援や、その場の状況に応じた支援が大切。 ○言葉を発する機会を増やすことや、本人の気持ちをスッキリさせる。
今後の指導方針	○視覚支援を様々な場面で活用する。 ○言葉を発する機会を増やし、様々な教員とコミュニケーションをとるようにし、気持ちを安定させる。

３　「まちだ祭体育館練習、家庭の授業」における指導の実際

11 月の実践は、体育館で劇練習に参加するように促すことをおこなった。

＜手立て＞

台車、車いす、ボール等を活用し、体育館に入れるように支援する。とした。

＜評価、様子＞

体育館は入ることができなかったが、家庭の授業には入ることができた。体育館に入れなくても、その他の活動を自分から進んで行うことができ、なにより、言葉によるやり取りができるようになったのが大きな成果である。家庭の授業に入れるようになった要因は、見通しが少しずつ持てるようになったことや、興味があること（背景に音楽を挿入したデジタル教材）を取り入れたことが考えられる。

＜今後の指導方針＞

視覚支援が有効なことと、言葉によるやり取りが増えてきたので、視覚支援を一層増やすことや、言葉を発する機会を増やし、様々な教員とコミュニケーションをとるようにし、気持ちを安定させることを今後の指導方針とした。

まとめ	
結果	・マスクが少しずつできるようになってきた。 ・挨拶、礼ができてきた。 ・ポケットに入れたものを戻すのがスムーズになってきた。 ・言葉で表現することが増えてきた。 ・問いかけに対して、要求を口頭で伝えられることがある。（iPad）
考察	・学年全体で共通認識をもって「視覚支援」「言葉掛け」「本人の意思を尊重しながら活動に取り組む」「見通しをもたせる」等を続けた結果、本人の意識を変えていったのではないか。
まとめ	・視覚支援が有効なことが分かったこと、言葉によるやり取りが増えてきたことが大きな成果だった。卒業後も継続していただけるように、進路先に引き継いでいく。

４　まとめ

＜結果＞

今までできなかった、マスクを正しく着用することや、挨拶、礼ができてきた。また、定時排泄の言葉掛けにスムーズに行動できるようになったことや、ポケットに入れた物を戻すことがスムーズになってきた。言葉で表現することも増え、こちらの問いかけに対して、要求を口頭で伝えられることができるようになってきた。

＜考察＞

学年全体で共通認識をもって「視覚支援」「言葉掛け」「本人の意思を尊重しながら活動に取り組む」等を続けた結果、本人の意識が変わっていったのではないかと考えられる。

おわりに

副校長　鈴木　泉子

「まちだの実践」が、昭和４８年度から肢体不自由教育部門（Ａ部門）小・中・高等部、知的障害教育部門（Ｂ部門）小・中・高等部及び分掌・委員会等における研究に関わる取り組みをまとめた研究紀要として作成され、今回で５０号となります。本校では、昨年度までの３カ年で『豊かな社会生活を送れる知識や姿勢を身に付けるために～学びを深める工夫「しかけ」のある授業づくり』というテーマで研究を行ってまいりました。その研究のまとめの一つとして、教科指導と自立活動の指導をいかにつなげることが大切か、ということになり、今年度は、全校研究テーマを「自立活動の視点をいかした協働的な指導について」と設定しました。そして、各学部・学年チームにおいて、この全校研究テーマのもと、児童・生徒の学びを追求することは学びを深めることに繋がると信じて実践研究を行ってまいりました。ただ、今年度も新型コロナウイルス感染拡大防止のため、感染対策を徹底した取組や教育活動の工夫が求められ、実践研究を行っていう上では困難な時もありました。こうした中でも研究を停滞させることなく、全校で一致団結し研究活動を前進させ、児童・生徒の学びをより一層深めることができたのではないかと感じております。

今年度は、自立活動の視点を生かした「ケース研究」を中心に研究を進めてまいりました。その中で、流れ図の意義の理解が深まり、段階的、焦点的、論理的で根拠のある指導の大切さと協働的な教師の学びの重要性を認識することができました。しかしながら、ただ研究をまとめれば良いというものではありません。研究をまとめるだけでなく、研究で学んだことが次の町田の丘学園に根付かせなければなりません。その為にも、今後とも忌憚のない御意見を賜りながら、児童・生徒とともに成長し続ける町田の丘学園を目指したいと考えております。

今年度も多くの皆様の御指導、御支援を賜り、この冊子をまとめることができました。決して十分な研究とは言えませんが、一つでも御参考になる点をお伝えでき、お役に立てていただけたら嬉しく思います。また、お気付きの点がございましたら御指摘、御指導いただけましたら幸いです。

末筆ながら、あらためて本校の研究活動に御助力をいただいた皆様方に感謝いたしますとともに、この「まちだの実践」第５０号について、更なる御指導を賜れれば幸いに存じます。

今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

「まちだの実践」第 50 号
令和４年度（2022 年度）研究・実践報告集

発行日　令和 5 年 3 月 31 日
編集・発行　東京都立町田の丘学園（本校舎）
〒195-0063
東京都町田市野津田町 2003 番地
電話　042-737-0570
ﾌｧｸｼﾐﾘ　042-737-0580
東京都立町田の丘学園（山崎校舎）
〒195-0075
東京都町田市山崎 1 丁目 2 番地 17 号
電話　042-792-4260
ﾌｧｸｼﾐﾘ　042-792-4264